

審査の結果の要旨

氏名 北村 篤志

近年セルフヘルプ・グループ (SHG) は、様々な社会領域で人々のサポート資源として重要な役割を果たすようになりつつある。本研究は、「非行」と向き合う親たちの SHG を対象として、そこでの参加者たちの経験を探索し、グループの機能とそれを作り出す条件を質的に検討したものである。

本論文は、全 4 部 9 章で構成されている。第 1 部「研究の展望」ではまず、SHG に関する先行研究を概観した上で、SHG を「ナラティブ・コミュニティ」として捉える視点の意義が論じられた (1 章)。その後、本研究の全体的な方法論と手続き、およびフィールドの概要が提示された (2 章)。第 2 部「親たちの会における参加者の語りの変化」では、研究 1 として会に登録する親に対するアンケート調査を行い、200 名あまりから回答を得て、「非行」を示す子どもの親がどんな体験をしているかを概括的に捉えた (3 章)。次に、グループの例会への長期にわたる参与観察、および 5 人の親に対する半構造化インタビューに基づき、例会における親の語りの変遷を検討した。結果としてそこには、「非行」に巻き込まれる語り、「非行」を捉え直す語り、「非行」を受け止める語り」という類型、およびこの順序での変化と視点の広がりが見られることが示された (4 章)。第 3 部「親たちの会における語りの構築」は 3 つの研究からなるが、研究 3 では、個人の外部にあるディスコースとの関係のなかでの語りの構築が論じられ、グループのコミュニティ・ナラティブが親のポジショニングの幅を広げる働きをするその機序が示された (5 章)。研究 4 では、よりミクロな過程に注目し、グループの例会のなかでの相互作用、特に笑いに焦点を絞った分析がなされた。結果として、聞き手との関係のなかで語り手が自ら発する笑いや聞き手から投げかけられる笑いが語り手の語りの方向づけや評価に影響すること、また、それがコミュニティ・ナラティブの習得や専有を促進する機能をもつことが考察された (6 章)。研究 5 では、親以外の参加者として専門職や学生等と参加者との関わりに注目し、親以外の参加者もまた親とは違う意味での当事者性をもっており、親の語りを活性化したり会のナラティブを支えたりする機能をもつことが示された (7 章)。第 4 部「総括」では、まず「非行」と向き合う親たちの SHG の特徴と機能が今回の研究の結果をもとに要約された (8 章)。最後に、本研究の臨床心理学の実践への示唆がまとめられ、臨床心理士が SHG と関わりながら実践をしていく際の課題が論じられたほか、SHG 研究にナラティブの視点を入れていくことの意義が論じられた (9 章)。

ナラティブ論の視点は社会科学的研究において近年広がりを見せつつあるが、本研究は SHG という対人援助実践の場にその視点を適用し、SHG の独特な特徴について従来とは異なる視点で議論した点、また、ナラティブの視点の適用可能性を広げた点で、高く評価することができる。以上の理由から、博士 (教育学) の学位を授与するにふさわしいものと判断された。